

## 「東京農工大学科学博物館の沿革と現在」

齊藤有里加

東京農工大学科学博物館の由来は古く明治19年にさかのぼる。時代の推移とともに産業は繊維工業から重工業、情報技術へと大きく移り変わるが、当時から先端知を公開する機能としてその使命をはたしてきた。一方で大学の歴史とともに培われた養蚕・繊維資料は膨大であり、あらたな知識の創造の可能性を秘めている。繊維機械の動態展示、繊維工場実習の縁をもつ生涯学習、学生によるサイエンスコミュニケーションなど、多く活動者が博物館を活性化させている。

### 1. 近代の博物館

- ・ウィーン万国博覧会（M6）佐々木長淳（ながあつ）ヨーロッパの蚕糸機関を視察
- ・佐々木長淳の「蚕事学校」構想
- ・内山下町→西ヶ原へ移転「蚕業試験場」「蚕業講習所へ」9参考品陳列所が基か？
- ・明治35年標本室の整備
- ・明治42年古写真「museum」の表記
- ・標本、掛図、模型などを用いた公開を実施
- ・当時としての先端資料「シャルドンネ人絹」

### 2. 現在の博物館

- ・繊維博物館として昭和28年に博物館相当施設へ
- ・平成 年に全学組織化し「科学博物館」となる
- ・繊維関連の資料を収集し、その技術の変遷と技術革新を学ぶ施設
- ・戦後自動繰糸機、エアジェット織機を開発したエンジニアによる動態展示（繊維技術研究会）
- ・「タッチアンドトライ」展示資料をつかった繊維技術の体得と展示公開（博物館友の会）
- ・理系学生の視点を生かし、科学の基礎理論をわかりやすく伝える（musset）
- ・博物館5か年計画 「収蔵資料のデジタル化」  
蚕糸学術コレクション  
例）・IIIFでの「蚕織錦絵コレクション」約400点の公開
  - ・クラウドファンディングによる「葵町製糸場図面3D化」  
→古い資料から新しい価値を見出すことに挑戦